

笑ってくれてありがとう

福井県 武生第一中学校 3年 永宮 亜紗陽

外国人の女の子が私の学校にやってきた。去年の秋頃のことだったと思う。クラスが違うので話すこともないだろう、と思った私は、すぐにそのことを忘れた。

小さい頃から絵を描くのが好きだった私は、中学校でも美術部員として活動していた。ある日の放課後、美術室に行くと、外国人のあの女の子がそこにいた。どうやら美術部に入部らしい。少し驚きはしたものの、美術部は途中入部の人も多いので、そんなに違和感はなかった。ただ、少し気がかりだったのは、彼女と私が隣り合って絵を描くことになった、ということだ。

日本語が苦手らしい、しかもいつも無表情な彼女への接し方がわからなかった私は、特にこれといったこともせず、なんの会話もないまま、お隣さんとの三学期を過ごした。

別に話さなくてもいいか、そんなに困ってなさそうだし。春休みに入る頃には、そんなふうに思い始めていた。そして、正直に言うと、彼女に話しかけることが怖かった。おせっかいと思われたらどうしよう。人見知りの私は、彼女とコミュニケーションをとることに怯えていた。

それからしばらく経った頃、私は部活の休み時間に友達としゃべっていた。いつも通り変顔をしたりさせたりしていると、ふと隣から笑い声が聞こえた。もしや、と思い声の方を見ると、彼女が楽しそうに笑っていた。日本語がわからないはずなのになぜ、と一瞬わからなかったが、しばらくして気づいた。国籍は違っても、笑いは共有できるということに。変顔をすれば笑ってくれるんだ。

それから私は、何かあるたびに変顔をした。明日、部活あるらしいよ、プラス変顔。始まるのは9時だよ、プラス変顔。そうすることで、不思議と言葉も伝わりやすくなっている気がした。馬鹿みたいに思えるかもしれないが、決してふざけているわけではなく、これが私にとっての彼女との「コミュニケーション」だった。

彼女に話しかけて大丈夫だろうか、と不安だった。迷惑がられるかも、と思っていた。けれど全然そんなことはなくて、彼女とふつうに会話することができた。また、後から知ったことだが、彼女がいつも静かだったのは、「しゃべるのが怖かったから」らしい。少しの行き違いだったのだ。

たとえ使う言葉が違っても、自分なりの方法でコミュニケーションをとろうとすることも、「小さな親切」の一つだと思う。例えば、声をかけるのが恥ずかしいなら、目が合ったときに笑いかけてみる、というような。

最近、彼女はわからないことがあると私に聞いてくる。それがうれしくて、少しくすぐりたい。新作の変顔を見せながら、あの時彼女が笑ってくれてよかった、と思う。